
彼氏彼女の日常 連載版

NATA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼氏彼女の日常 連載版

【Z-コード】

N67690

【作者名】

NATA

【あらすじ】

暇が大嫌いな彼女。 そんな彼女はいつも俺に迷惑をかける。

彼氏彼女の日常 連載版（前書き）

小説に関するものだと一年振りの投稿。面白いかどうか分かりませんが、よろしくお願ひします。

前に連載にしてまとめたほうがいいとアドバイスもらつたのでここから連載版に変えてみました。全部まとめようとすると作品を消しそうで怖いので……

俺には彼女がいる。

彼女は暇を嫌い、よく俺をからかう。だがそんな彼女も優しい一面を持つていて。

「つられた」

現在、夜の9時を過ぎた頃、俺は朝の9時から大学のレポートを書いていた。

最近、家にはあまり帰りたくないなつた。家に帰ればいつもの様に彼女にからかわれる

この頃、彼女にからかわれる事により、精神的に疲れが生じていた。

だが、早く帰らないと行けない。メールで早く帰つて来いと言われたから帰らなければいけない。完全に尻に敷かれている。俺は急いで帰り、自宅の玄関前に着き、ドアを開けた。

「ただい……」

『バーン』（爆発音？）

「ハッピーバースデイ、お誕生日おめでとう」
しばし呆然とする。そして思い出す。

「ああ、そつが今日は俺の誕生日か」

「やつぱり忘れてた。待つてたんだよ」

彼女はすねたように言った。でも、それは可愛らしいすね方だった。

「朝から大学お疲れ様。早速ご飯にしましょ。あ、でも、疲れているかでしょ？肩もんであげる」

俺は嬉しかつた。こんなに彼女に優しくされたのは付き合つた当初ぶりだった。

俺達二人は居間に入り、さつそく肩をもんでもらつた。

正直、彼女は力がなく、そんなに気持ち良くなかった。だが、彼

女の優しさに俺は疲れは取れていった

その後、彼女は手料理を出してくれた。

しかし、俺が大学近くにあるマックで「」飯を食べてしまい、正直、あまり空いてはいなかつた。

だが、彼女の気持ちを無下にする訳にはいがず、無理して食べた。そして、一時間程度胃の休憩をしたあと、メインディッシュがやつてきた。

「さあ、メインディッシュのケーキを食べましょ」

彼女は嬉しそうな笑顔でケーキを取り出した。そして、自慢げに言う。

「今日の自信作だよ。クリームといちじにこだわった物を使っています」

彼女はまるでダンスをするかのように自慢のケーキにロウソクを立てて火を付けた。

俺はそんな彼女を見ていると自然に笑みがこぼれたが、一つだけ疑問に残る事があつた。

「なあ、一つだけ聞いていいか?」

「ん、どうしたの」

「ロウソクの数、明らかに足りないぞ」

そう、ロウソクの数が足りなかつた。普通、年の数だけ、ロウソクを立てるはずだ。

しかし、ケーキに立っているのは10個しか立つていなかつた。大雑把に計算しても俺の年の半分程度しか立つていなかつた。

しかし彼女は「これで合つていいよ」と聞き流して部屋の電気を消した。消えた瞬間。ケーキの周りだけが全て世界だと思えるほどの部屋中が真っ暗になつた。

俺は火を消そうとしたが、彼女に静止を掛けられた。

「それでは問題です」

「問題?」

「なぜ、このケーキには10本しか立つていないのでしょうか?」

「別に食べながらで良いだろ」

ガツン（打撃音）

「ちゃんと答える」

「分かった。だから愛用の電話帳で叩くなあ

俺は考えた。

そして、答えを出した。

「この作者の10回目の投降」

「全然違います」

「じゃあ、降参」

早くケーキを食べたかった。しかし、彼女はこの問題にどうしても答えて欲しくて提案を出した。

「じゃあ、口ウソク一本消す毎にヒントを出すね。そして、全て消し終わってから答えを出すという事で」

「いいだろ」

口ウソクは10本はある。10回もヒントをもらひれば答えられる

だろ。

俺は一本ずつ消していく。そして、彼女が一つずつヒントを出す。

「さくら……椿……かすみ」

「花の名前か？てえ、電話帳を構えるな」

「最後まで消してから答える約束」

「分かった」

俺は火を消す。そして、彼女はヒントを出す。まるで目の数を数えるように。

「みどり……あおい……すみれ」

「……」

俺はなんとなく答えが分かってきた。でも、火を消さないといけない。

「きよみ……はるみ……ともえ、つばさ」

わざとすぐがすべて消え、真っ暗になる。周りが何も見えないほど、

そして、彼女いる方向から声が聞こえた。

「さあ、正解は」

「一年間浮気した数です」

彼女は優しい一面があるが、同時に恐い一面があつた。

彼氏彼女の日常 連載版（後書き）

読んでいただきありがとうございます。気が向いたら投稿します。とりあえず、残り2本のストックがあるので2週間以内に一本出します。でわでわおやすみなさい。

窓からこぼれる眩しい朝日に俺は目が覚めた。

体が少し重かつたが気分は上々に布団から身を起こした。体を伸ばしながら目覚ましの時計の鳴らない今日、一日を実感する。

「休みだ」

今日は久しぶりの休みだ。最近、大学のレポートやバイトに忙しくてゆっくり出来なかつた。でも、当分は大学のレポートがないからゆっくり出来る。

とりあえず今日は寝よう。多忙だったから疲れて仕方ない俺はあおむけで布団に入った。だが、そんな事を構い無しに俺の部屋に来る女がいた。

それは俺が寝ているのを知つていてはすなのに、わざわざ、大きな足音を立てながら自分の部屋のよう、堂々と入り、布団の近づき、止まつた。見えてはいながら声で俺の事を見下ろしながら言つてゐるのが分かる。

「暇です」

そうだよなあ。お前は暇だよな。俺がせつせと働いているのにお前の所はレポートが少なくバイトもしていながら暇だよなあ。だが俺は疲れているだから寝る。絶対に起きない。だが、彼女は言つ。

「暇です」

高圧的に言つ彼女。『だから俺は眠い』と彼女に言いたい。しかし、そんな事をしたら自分が起きている事を彼女にばれてしまい、寝かせてくれなくなる。だから寝たふりをかます。

彼女は俺が寝つていてると思つて諦めたのか足音を立てて遠ざかつていた。しかし、彼女はすぐに俺の部屋に戻ってきた。そして警告をした。

「起きないと酷い目を見せますよ

俺は無視して寝たふりをした。

それから数秒。俺の鼻と口に何かが塞がつた。

最初は少しひやりとした。しかし、すぐに息苦しさを感じた。

俺は必死に息をしようとするが鼻から何かが音を立てて気持ち悪い物が進入してきた。出した鼻水が逆流したみたいだ。その進入が余計に息苦しさを感じ、俺を圧迫する。

そしてその息苦しさに耐え切れず、俺は起き上がつた。

起きた瞬間。俺の膝にタオルが落ちる。触ると若干濡れていた。俺は彼女の顔を見る。

彼女は爽やかな笑顔で「おはよう」と言つてきた。

爽やかな笑顔でさつきまで行為を忘れさせようとしているのがよく分かる。それはそれはとても爽やかな笑顔だった。しかし追求は忘れない。

「お前何をした」

俺は、少しどスを効かして言つた。正直、いつものような軽口で言うような余裕ないほど苦しかった。

すると彼女は先程同じ笑顔で、

「中々、起きないから濡れタオルを……」

「濡れタオルを……」

「口と鼻に掛けてみた」

「殺す気か」

彼女は俺の回答に首を振つた。少し、顔を赤らめ、手を頬に乗せながら……

「起きないから起こしたの」

「下手したら逆に眠るわ」

「いいから遊ぼうよ」

「そうですね。彼女は暇だから俺を起こしたんだよね。そうじやなくちゃ起こさないよね。だが……」

「おやすみ」

俺は布団の中に潜る。

だが彼女も負けない。俺の体を揺らしながら、
「ねえ、遊ぼうよ」「みうよ」と言つてくる。

「このままじゃ埒が明かない。俺は起き上がり、何して遊ぶか聞いた。
「とりあえず、何をするつもりだ」

それを聞くと後ろに後光が出てくるような明るい笑みを浮かべた。
思えば、この笑顔を見て付き合い始めたんだよな。そんな事は置い
といて彼女は笑顔で何をしたいか答えた。

「岐阜城に行きたい。あんた城が好きでしょ」

「岐阜城？ 岐阜城と言えば、齊藤道三の居城で旧稻葉山城と言わ
れた難攻不落の山城。しかし、羽柴秀吉が岐阜城の裏門を見つけ、
あっけなく落城させた。その後、織田信長が小牧城から稻葉山城に
居城を移し……」

「はいはい。その話は岐阜城に着くまで置いといて、という訳で行
きましょ」

彼女は手を叩いて俺の話を遮った。まだ、齊藤道三の息子の話と
竹中半兵衛の逸話が残っているのに……

「というわけで岐阜城に行こう」

「断る」

「何で？」

彼女は少し頬を膨らませて言つた。俺はそれについて答える。

「前、そことは違う城に行つた時、城を見るのにすぐ飽きて近くの
土産屋に行つてその後は食い物屋に行つただろ。俺はゆっくり見れ
ないのが目に見えているか行きたくない」

「そんな、こんなに可愛い可愛い彼女が愛らしく起こしてデートで
誘つているのに」

「濡れたタオルを鼻に乗せる事が愛らしいのか？」

「まあ、その部分は置いといて可愛い彼女がデートに誘つているの
に行きたくないの？」

彼女は上目遣いで俺を誘つ。あかん。女の子に上目遣いはかなりぐ
つと来る。抱きつきたくなる。そして何でも言つ事を聞きたくなる。

だが……

「断る」

「ここで言つ事をを聞いたら彼女のわがままを助長する事になる。これは断つて彼女のわがままは早々聞かない事をアピールしないと行けない。

「そんな、私の事が飽きたのね。だから田中部長とメールばかりするのね」

「関係ねえよ」

「そんな訳ないわ。深夜の時でも暇な時にメールや電話しているじゃない」

「仕事だよ。おまけに男だし」

「そんな、男と浮氣していたのね」

「ホモじやねえ」

「ならメールの内容に愛してこむと重つ言葉があるのはなぜ」

「いやそれは……」

やばい。彼女は俺の携帯メールを見る。何度、ロックナンバーを変えてもその度に破られる。彼女は俺専用のハッカーだ。言い訳を考えないと……

だが思いつかない。しかし、このまま黙っているとどんどん状況が悪化する。

「男と浮氣していたなんていうなつたらあんたの友達に言つてやる

「やめろ」

「うるさい。誰かに電話してやる」

やばい。これ以上誤魔化そうとするより自分の首を締めるだけ、いやむしろ無くなる。

「『めんなさい。浮氣しました』

土下座して俺は謝った。とにかく彼女を落ち着かせないと自分の首が無くなる。

「どこで知り合つたの？」

彼女はいつも口調で言つた。

「はい。バイト先で知り合いました」

「その子とはどこまで言つたの？」

「キスまでです。それ以上は言つてません」

「そう」

彼女はそう言つて机に座つた。でも、まだ弁解していない事がある。

「でも、俺は男には……」

「男に興味が無いんでしょ」

「そう男には全く興味が……」

「んー。ちょっとまで、彼女よ。今何て言つた。

「あの……」

「ん。知つてるよ。この前、暇つぶしで書いた小説で『浮氣相手は名字しか入れない』と書いたからあんたはそれを見た次の日から『部長』とか『係長』という役職名で誤魔化そうとしていると知つてるもん」

彼女は笑いながらそれを言つ。俺は永遠に彼女に勝てないのかもしれない。

「ついでだけど、役職名が付いている人間が深夜にメールする訳ないじゃん。あるならプライベートくらい」

そうだよね。常識的に考えれば上司が深夜に仕事の電話する訳ないよね。俺は浅はか過ぎる。

俺は布団にもう一度潜つた。しかし、彼女は布団を引き剥がして、

「岐阜城に行きたい」

「そうですか」

彼女はもう一度、「岐阜城に行きたい」と言つた。

このまま、断つても彼女は言い続ける。それに、浮気の問い合わせが恐い。今のうちに機嫌を取つとかないと……

「行きましょうか

「うん」

彼女は笑顔で俺の部屋を出た。

俺は布団に出て着替えた。すぐに戻ってきて、

「運賃よろしくね

彼女はそう言つて俺の部屋を出た。

ああ、今月も生活がピンチか……

俺の嘆きを気にも止めず、彼女はウキウキとしながら出かけている
準備をしているのだ。

パート8（後書き）

どうもこんにちわ読んでくれている人いるのかな？ 暇なので適当に自分が読んでいる本の紹介でもしよう。

奥田英朗の『空中ブランコ』

この話は精神科医伊良部先生と患者一人のトラブルコメディ。毎回、違う患者が来るんですが、伊良部先生の天真爛漫？ 破天荒な性格に患者は振り回される。しかも患者本人は病気について真剣に悩んでいるのに当の伊良部先生は医者としてはありえない言動を言い、ますます患者は困惑する。

それにより、色んなトラブルが起きるんだけど、精神関係の話はけっこつこつヘビーな話なるんだけどこの小説は逆に笑いにしてしかもその病気について分かりやすく理解ができる。精神の病気と笑いを求めている人にはおすすめ。まあさすがに今はやりの鬱や統失関係は出ませんよ。けれどおすすめなのは間違いない。ちなみに関連本は3つあるので、注意を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6769o/>

彼氏彼女の日常 連載版

2010年11月17日04時36分発行